



承前

本作は、以下作品の続編にあたります。前作をまだ読まれていない場合は、下記リンクからどうぞ。

[第一部『神谷内香織は自分を知りたい』 http://p.booklog.jp/book/98662](http://p.booklog.jp/book/98662)

[第二部『稲荷木燈花は貴方が知りたい』 http://p.booklog.jp/book/114287/](http://p.booklog.jp/book/114287/)

1 (占)

三ト八恵(みうら やえ)というのが私の名前である。これがすこぶる書きにくい。三、ト、八、というはじめの三文字が曲者で、縦書きのときなどはともかく重心がつかみにくく、恨みがましくて仕方がない。だから私は、三ト八恵なんていう名前は、どうしても本名を使わなきゃいけないときにしか使わない。まあ、何か申込みの書類とか、定期試験の答案とか、学生定期作るときとか.....まあ、名前が必要なときってだいたい本名が必要なだけけれど。それでも私は、友人に向けて名乗るときは、もう最初から、本名ではない名前を名乗る。

「みとはちって呼んでください」と。

三ト八恵の「ト」という字はト占のトで、ト(うらな)いのトであって、カタカナの「ト」とは全然わけが違うのだけれど、私はこの文字を、ただの「と」に落としてしまう。貶めてしまう。この際だから「恵」のことは無視してしまっ、三ト八恵はこうして三ト八、みとはちとなる。占いは嫌いじゃないけど好きじゃない。これまで何度も役に立ってきたし、助けられてきたし、今後も頼ってしまうのだろうけれど、占いが名前に埋め込まれているなんて、それしか能がないみたいで気に入らない。

占いというのは、見えないものを見る技であり、知り得ないものを知る業だ。未来、人の心、謎の正体、運勢、そういったものを、知ることができるのだという。確かに、そういうことができることが、できてしまうことが、三トの血筋にはあるのだろう。けれど、私が思うに、なんだって知れば良いというものではない。ときには、知ってしまったことを後悔する、知らなければ良かった、知りたくなかったと思ってしまう事実が、占いによってもたらされてしまうこともある。

そう、たとえば、同居人がもう普通の人間ではない、とか。

2 (狐)

一瞬の不快な沈黙の後、街の明かりが一斉に灯ると、一瞬前まで神谷内香織であった肉の塊が、地面に転がっているのを私は発見する。

私は、その叫び声が、自分のものだとは認識するのに一体何秒かかったのか、よくわかりません。ただ、肺の中の空気が全部なくなって、いったんその叫び声をやめて息を吸わなければという段になって初めて、私は自分が叫んでいたということに気づいたのです。

駆け寄って手を触れようにも、一体どこに手をつけば良いのか分からないほど、それはただの肉塊であり、血溜まりでした。

頭の中をガンガンと変な音が鳴り響いていました。深い水の底に落ちてしまって、耳の奥が圧迫されて、世界が遠ざかっているような心地でした。香織が、私の香織が、どうして。悪い冗談だと、誰かに言ってほしい。私が考えたのは、私が考えられたのは、そんなことだけでした。

「いやあ、めちゃくちゃだな」

声がしました。

「もうめちゃくちゃだよ、全く」

音もなく背後に立っているのは、よく知っている人でした。

やっとのことで私は喉の奥から声を絞り出します。

「お、お父さん」

父は呆れた顔をしていました。

それは。

その顔は。

その顔を見て、私はすべてを悟りました。

「これはやり過ぎだよ。二色」

それは、母に対して呆れている時に、父がよく見せる表情だったのです。

3 (狼)

鮭、玉ねぎ、豆腐、キャベツ、大根、長ネギ、ニンジン。

味噌仕立て。

ぐつぐつぐつ、と鍋の中は煮え、食卓を囲む僕たちを湯気と味噌の香りが覆う。

そう、僕たちは食卓を囲んでいる。

正面には燈花のお父さんが座っており、せっせと食卓を整えている。

「はい、香織さん」

そう言って微笑みながら、僕に取り皿を渡してくれる。

「ありがとうございます」

とは言ったものの、未だに僕は状況が飲み込めていない。

.....なんだこれ。

右手には女子小学生、じゃなかった、燈花のお母さんが座っている。輝く金髪、交じるは純白。女子小学生が着てそうな適当な英語が書いたパーカー姿だった。よく見たらFirefoxと書いてあった。ブラウザか？

「おいおいおいおい狼娘、なにをそわそわしておる。集中しろ。鍋は戦いじゃぞ」

鍋は戦いではなかった。

唯一助けを求められそうな燈花は、僕の左手に座っているけれど、さっきから様子がおかしい。明らかにむすっとしているというか、拗ねているというか。

「おい燈眞、山椒をくれ」

「はいはい」

すでに燈花のお母さんが鍋を食べ始めていた。戦いだった。

*

時間を少々遡ると、数時間前、燈花と別れて、家についた僕は、今日一日を反芻していた。

反芻。何度も何度も同じことについて考えを巡らせること。

燈花と久しぶりに会って、話をした。直接話さないといけないと思ったと彼女は言って、僕たちは直接話した。

スカイツリーの展望台についたら、時間がやけに早かったから、いい感じに夜景を見るというわけにはいかなくなってしまった。夜景を見るプランなのに集合時間が朝というのが間違っている。そもそも、僕も夜に出歩くのはやめろと言われていたし、日没までには帰らないといけない変な門限がついていたのだった。そのかわり、次に来る日はしっかり約束させられた。まあ、昼間の景色も充分良かったけれど。結局、僕の使った言葉は、考えてみれば最後までなあなあだったような気がして、急に不安になる。本当に僕の気持ちは伝わっただろうか。

いや、伝わってしまったら怖いような気もする。

どうして僕なんだろうか。燈花は僕の中にわからないところがあると、見えないところがあ

って、興味を引かれたのだというようなことを言った。けれど、わからないところって、それは僕が背負っている狼のことだったんじゃないか。だとしたら、その秘密を知られてしまった今、それでも僕は興味を持ってもらえる存在だろうか？

いや、けど、大丈夫。僕たちはきっと大丈夫だと、どこかで胸が高揚している。

だって、さっき、付き合うことになった……よな？ 多分、そういうことだと、思うんだけど……。あれ……。

そんなこと本人に確認するなんて馬鹿みたいだなと思った。電話でもして聞いてみるか、と思っておかしくなって笑ったけれど、電話をするというアイデア自体で胸が変にうねった。この不安感はどうしたら良いのだろう。付き合うってなんだろう。この人とこの人は付き合ってますと誰かが認定してくれるわけでもない。いや、誰かに認定されても困るけれど……。認定って誰にされるんだよ。

ピンポン、と音がした。

我に返った。一瞬遅れて、それがインターホンの呼び出し音だと気づく。

ピンポン、ともう一度音がした。カメラがついているような上等なやつじゃないから、誰が来たのかは分からない。別に治安が悪いというわけじゃないけれど、一人暮らしだし、普通は夜に来た心当たりのない来客は無視してしまう。けれど胸騒ぎがする。

ピンポン、と三度音がした。

ゆっくりと、できるだけ音を立てないように立ち上がり、僕は玄関のドアへと向かう。そっと三和土の靴を踏み分けて、ドアスコープを覗き込む。

……知らないおじさんがいる。

え、なにそれ。こわ。

ピンポン、とまたチャイムが鳴らされた。

もう一度除いてもやはり見覚えのないおじさんだった。なんだろうこの人……。

ピンポン、とまたチャイムが鳴らされた。

全然帰る気配がないな。改めてドアスコープごしに息を殺して様子を見ると、普通に普通の格好をした、普通のおじさんだ。良い人かは分からないが、取り立てて悪い人にも見えない。

ピンポン、とまた鳴るチャイムを聞いて、僕は観念してドアにチェーンをかけて、そっと隙間を開けた。

「……はい」

「夜分遅くにすみません」

おじさんは思ったより柔らかい声で言った。本当に顔が申し訳なさそうだった。

「稲荷木燈花の父です。燈花の恋人の、神谷内香織さんですか？」

……認定されてしまった。

*

鍋は味噌仕立てで、濃厚な甘さがあった。しかし、鍋に玉ねぎとかキャベツって、普通入って
いたっけ？

「おいこの鍋、油揚げが入っておらんではないか」

「石狩鍋に油揚げは入れないんじゃないかな」

「はあー？ 豆腐が入ってるんじゃからアブラゲ入っても良いじゃろうが！」

「入っててもいいからって、なんでも入るわけじゃないからね」

ハイテンションな稲荷木母の叫びをさらりとかわす稲荷木父であった。なんだろう、ぶっ飛ん
でる人たちだけれど、案外お似合いなのかもしれない……。

『アシキ』の伝説によれば、この女子小学生……じゃなかった、稲荷木二色さんは、人間を仲違
いさせる極悪な半妖だったはずで、どうしてそれが普通のおじさんと娘と三人で東京に暮らして
いるのか、僕には想像もつかない。

それにしても、石狩鍋か。

石狩鍋なんてちゃんと食べたことなかったけれど、白菜じゃなくてキャベツなのは、北海道の
イメージなのだろう。玉ねぎが入っているのもきっと北海道流なのだろうと思う。漁師がとった
鮭で作って食べてるイメージ。まあそうすると油揚げは違うかな。

「……あれ、お二人のご出身って、北海道なんですか？」

実は、違うって知っているけれど。二人は同じ××県の出身だということを燈花から聞いていた
。けど何か、会話の取っ掛かりが欲しかっただけ。燈花は黙々と鮭を食べている。さっきから何
もしゃべらない。

「いや、そういうわけじゃないよ」

稲荷木父が口にした地名は、やっぱり僕が前に聞いたのと同じだった。

「これは単に、験担ぎみたいなものさ」

「……験担ぎ？」

「勝負事の前に、カツとじ鍋定食を食べるようなものだね」

そこは普通にカツ丼でよくない？

「狼娘、特にお前がしっかり食っておかんといかぬふお」

「二色、言い終わってから食べるモーションに入りなさい」

この二人、案外お似合い……というか、もう父娘にしか見えない……。

燈眞さんに会うまでは、一体どんな人間ならば二色さんの夫が務まり燈花の父が務まるのだろうと思ったけれど、この超然とした普通のおじさんぶりを見ていると、ある種の納得感が生まれてきた。

「どういうことですか」

「かりゅうひよほほはふほは」

「二色、食べ終わってから喋るモーションに入りなさい」

燈花はさっきから黙って鮭ばかり食べている。鮭ばかり食べるな。山椒かけすぎだろそれ。

「まあ聞け狼娘。お前はさっき、狩人に殺された」

「は？」

「じゃが殺されたのはお前じゃなく、儂が化けたお前だったというからくりじゃ。恩に着ろ。崇めろ。奉れ」

……は？

「次は反撃じゃ。石狩鍋を食らって、狩人を食ってやるんじゃ」

卓に流れる沈黙。ぐつぐつ言う鍋の音に混じって、燈花が母親を無視して鮭を食べる音だけが響く。鮭ばかり食べるな。

「うん、香織さん、僕から説明させてもらうね」

最初からそうしてください、と僕は言いそうになったけれど、黙って頷いた。燈花、山椒かけすぎだろ。

4（狼）

「香織さん、君は今、公安による排除対象に指定されている」

燈花のお父さん、稻荷木燈眞さんは、静かにそう言った。

「公安の妖異局については知っているよね」

「……はい」

公安委員会、妖異局。その名は藤木先生から聞かされている。

警察組織。実力行使担当。公の安全を守るもの。人間社会と共生は不可能だと判断された異常な存在、害悪とみなされた妖異を、力でもって排除し、無力化する組織。

藤木先生の本来の所属である文化庁宗務課とは、正反対でありながらにして同じコインの裏表、そういう組織だという。藤木先生がかつて僕の火鼠をそうしたように、文化庁というのは、ありとあらゆる手を尽くして、妖怪を保全する。強力な妖怪の力を弱め、角を矯め、牙を丸め、怒りを逸してしまう。対する公安は、そういう手段が最早使えなくなった存在、道を外れ、人に害をなす存在を、消し去ってしまう組織だ。

「君は先月、肩を撃ち抜かれている。そしてつい先程、君に化けた二色が、それはもう文字通り蜂の巣にされている。どちらも最近この街に投入されている、公安の『狩人』の仕事だ」

「僕に化けた、っていうのは……」

稻荷木母は、稻荷木二色さんは、ニヤついていた。

「きっと狩人は、完全にお前を殺したと思い込んでいることじゃろうな」

僕が、殺された？

「いや……そうとは言えない。結界を張って目くらましをして逃げてきたから、狩人は香織さんの死体を確認できていない。第三者が化けたフェイクだったとは気づかれていないかもしれないけれど、無害化を完了させたとは認識していない」

香織さんの死体。

食卓を囲みながら自分の死体の話をされているというのは変な話だった。

現実感がない。

なるほど二色さんならば、伝説の半妖狐『アシキ』ならば、本当に僕と完全に見分けがつかないような化け方もできるのだらうと思うけれど、それがすでに殺されていると言うのは話が二段階くらい飛んでいる。ついていけない。

……けれど、わかったことが一つあった。

燈花の機嫌がやたら悪い理由だ。明らかに母親に向けて拗ねたような態度なのは、二色さんが僕に化けたことを怒っているのだらう。

確かに、僕がその立場だったらと思うと。

つまり、燈花だと思っていた人の中身が実は母親で、燈花に向ける態度とか言動とか、そういうのを親に向けてしまったらと思うと。

ぞっとしない。

怖すぎる。

最低だ。

僕のほうが赤面してしまう思いだった。燈花、変なこと言ってないだろうか。ちらりと視線をやると、燈花はもう鮭がなくなった取り皿に、山椒を振り続けていた。重症だ。

二色さんはなんだってそんな恐ろしいことができるのだろう。やはり妖怪としての格が違うのか。

「実際この通り。現時点でも、神谷内香織は有害度3で排除対象に広域指定されている」

そう言って燈眞さんはスマートフォンを取り出して、僕に示した。

画面には確かに、僕の名前と、排除指定の文字がある。

「え、公安の指定って、こんな風にインターネットで見られるんですか」

そういう公の組織ではないと思っていたのだけれど。

「いやいや、これはうちの貸与端末だよ。ああ、まずそこから説明していないね。僕は東京都の怪異福祉局で働いているんだ」

「ああ、そうなんですか」

そうなんですか、で済む話ではないかも知れず、もっと驚くべきところなのかもしれないけれど、僕はその程度のリアクションしかとれなかった。何しろ、自分が死んでいる話のほうが重大だし、自分が公安に目をつけられている話のほうが重要だ。

文化庁が妖怪の保護を、公安が妖異の排除を司る機関であるならば、怪異福祉局はそれらの中間に位置する組織だ。バランスを保ちながら怪異が人類と共存できるよう、日常的な管理を担っているのかなんとか。いや、燈眞さん、奥さんも娘も普通に変身してるけど、管理できてるんですかね……。

「この権限では、詳しい情報は見られない。君の情報は殺人未遂ということだけがここに書かれている」

殺人未遂。

それは現実離れした単語だった。殺人未遂？ 僕が？

「何を指しているかは、いちおう推定できる。先月の満月の時、君が狼の状態で燈花を襲おうとした事だろう」

それを改めて、第三者に、いや被害者たる燈花の父親である燈眞さんに、こうして淡々と言われてしまうのは、なんとも居心地が悪かった。

「けれどこれは不自然だ。まず第一に、実際殺人は起こっていない。君はその時、狩人の射撃によって倒れ、燈花を傷つけてはいない。そして狼の状態を適切にコントロールしている限りは、君には他者に危害を加えるリスクはない。そこに有害度3は、やりすぎだ。公安の排除指定というのは、現在のリスクによって決められるんだ。これが普通の、人間向けの警察と違うところだけれど、過去に犯した罪を償わせるシステムじゃない。知っているよね」

燈眞さんが滔々と語り続ける。僕はただ、頷くしかできない。燈花がキッチンの方へ消えたと思ったら、麺をもって戻ってきた。稲荷木家の石狩鍋のメはラーメンか。二色さんが「いいぞ」と言ったが燈花は無視した。

「第二に、さっき君に化けた二色は、素の状態の君に化けている。人狼状態じゃなかった。それ

なのに狩人にあれだけ発砲されている。下手をすれば、無害化どころか人間としての神谷内香織すら殺しかねない勢いで撃たれている。明らかにバランスが取れていない。でっち上げと言うか、微罪逮捕というか、不自然だ」

人間としての僕を殺しかねない。現実感がない。怖い言葉のはずだけれども。

燈花が鍋の中からラーメンを一本取って口に運んだ。咀嚼して、ん、と首をかしげる。まだ硬いのか、と思っただけもうひと束とって食べる。ん、と首をかしげる。こいつ、まだ硬い感を出して味見で稼ぐつもりか。それを見抜いた二色さんがものすごい量を自分の器に移している。戦いは静かに始まっていた。

「それと、これは証拠を見せられないけれどももう一つ。この有害認定、今確認できる記録上は、先月からずっと有効だった事になっている。けれど、僕が見間違えでもしていないかぎり、こんなものはずっと出てはいなかった。僕の端末に表示されたのは今日の夕方が初めてだ。それを見て、君を保護しに行ったんだ。これは改竄だ……。だって香織さん、君はこの一ヶ月間、全く家を出てなかったわけじゃないだろう？」

「……はい、一応怖かったので、外出は減らしてはいましたが、全く出なかったわけではないです。昨日の日中はずっと外出していましたが」

「本当に有害度3がついていたら、それで無事でいられたはずはない。というか家にいたところで、突入されるかもしれないくらいだ」

燈眞さんは断言した。ああ、この家はとりあえず安全だから安心してね、と燈眞さんは慌てて付け加えた。話の大きさについていけない僕は、けれどそんなスケールの大きな心配はできず、どちらかという僕と燈眞さんの分のラーメンがなくなりつつあることが気がかりだった。

「だから何かがおかしい。今日の夕方だ。なにか、潮目が変わるようなことがあったんだと僕は思う。けれどそれが分からない」

そのとき。

ブーン、と、軽い音がした。

スマホのバイブ音だ。燈花がポケットからスマホを取り出す。

「潮目……」

燈花がそうつぶやいた。

「え？」

燈花は不思議そうに首を傾げた。

「みとはちさんからメールです」

その何が、潮目？

「……藤木先生が、逮捕されたそうです」

僕達が啞然としている間に、ラーメンは消えていた。

5 (占)

親友のお見舞いのあと、休日の大学に立ち寄った私だったが、それは決してそろそろ卒論に取り組もうとか、休日の人が減った図書館で勉強しようだとか、そういう殊勝な理由ではなく、単に家に帰りたくないというだけだった。結局ゼミ室でだらだらと時間を過ごし、病院のにおいとベッドに眠る彼女の顔から適切な時間と距離を取って、飲み終わらなかったペットボトルには「みとはち」と油性ペンで書いて冷蔵庫に突っ込んで、ようやくこちらの世界に戻った私は階段を降りた。

雨が降っていた。そろそろ梅雨だ。ゴールデンウィークの残響もさすがに虚しく、五月病という言葉訳もそろそろ苦しくなってくる五月下旬。夕暮れ時。内田ゴシックの薄暗い廻廊を抜けると、雨降り土埃のにおいがした。

あめあめふれふれ母さんが
蛇の目でお迎え嬉しいな

蛇の目ってなんだろう。なんであの傘を蛇の目傘って言うんだ。蛇の目。随分怖いじゃないか。あの傘を上から見たら蛇の目に見えるから、ということかな。それは分かるけど、あめあめふれふれの童謡に出てくると、雰囲気随分違うな。

スマホで調べてみれば、たしかに蛇の目傘の由来は、白い輪のデザインが蛇の眼に見えるから、ということだった。

蛇ねえ。

蛇は白蛇とか、神様にもなるけれど、同時に崇りやすい動物でもある。海外で言えば、ウロボロスのイメージで神秘性もあるけれど、アダムとイブを唆したのも蛇だった。そう考えると、蛇の目でお迎えに来てくれたお母さんは、本当にお母さんだろうか？

本当にお母さんだよ。

脳内で一人で会話するのやめろ。

私は透明で黒のドットが入ってもすればタピオカみたいな模様の傘を差した。ところで、女性の傘の色柄が下着の好みと一致するという俗説がある。蛇の目でお迎えのお母さんの下着も蛇の目なのかなと思ったりした。多分蛇の目ではないなと思った。私も透明で黒のドットが入ってもすればタピオカみたいな模様の下着を履いてはいないのだし。

下着の色柄が子供っぽいかどうかは後に明かすとして、いや明かさないが、私の容姿はどうやら子どもっぽい。背も低いし童顔だし、おかげで新入生と間違えられて、よくサークルの勧誘にあう。とはいえ五月も下旬となれば、しかもあいにくの雨模様の夕方となれば、まだ勧誘しているのは怪しい団体だけだろう。

「ゴスペルに興味ありませんか？」

ない。これはカルト宗教団体の勧誘である。コンサートとやらに行ってもいわゆるゴスペルっ

ぽい曲はやらない。オー・ハッピー・デイとかアメイジング・グレイスとかそういうのはない。なんかよくわからないが聞いたこともない神を賛美する歌を聞かされる。その後は勉強会とか謎の催しに次々と参加させられ、連絡を断とうとしてもしつこく勧誘し、大学内や駅で待ち伏せまでされ、人生観を語り合う合宿に連れて行かれ、教義を叩き込まれることになる。

「聖書の一節を読ませて欲しいのですが」
読まないでくれ。これはゴスペルと同じである。

「ボランティア活動に参加しませんか？」
しません。これもゴスペル。

「現代の経済問題と社会問題を研究しているサークルです」
一方的に社会問題を滔々と語り続けてくるのがこの勧誘の特徴である。そういった方向性の学問を志して入ってくる学生の中には話を真面目に聞いてしまったり、あるいは思わず反論して議論を白熱させてしまう若者もいるだろう。しかしそうなったが最後である。理由はよくわからないのだが彼らの勧誘のポイントは、ビラは見せるだけで渡さないというところである。左手は添えるだけ。中身は新左翼のどれかである。

「●●大学と合同でパーティーイベント」
セックス。

「テニスサークルです」
これはテニスをするサークルであり、特に不審なサークルではない。

「テニスとかをやるサークルです」
これはセックスである。

「料理教室」
ゴスペル。

「全国二万人のインカレサークル」
共産党。

「大学から不当な退学処分を受けた●●さんを支援しています」
新左翼。

「キムワイプ卓球部」

これはキムワイプ卓球をする団体であり、特に怪しいものではない。

「アンケート」

ゴスペル。

「履修登録の相談会」

ゴスペル。

「戦争法案はおかしいと思いませんか」

新左翼。

「学生自治会です。過激な思想をもったサークルの悪質な勧誘に注意してください！」

共産党。

「プロワイプ卓球会です。過激な思想を持ったサークルの悪質な勧誘に注意してください！」

ゴスペル。

なぜ詳しいかという、これらの勧誘は本当に私が新入生だったときに一通り受け、一通り内容を確認しているからだ。そういうのは一応、本当の中身が何なのか、覗いてみないことには気が済まなくて、面倒なのは分かっているけど、ついていってしまう。本当にヤバいと思ったら、その時に逃げればいい。逆に一度面倒を起こしておけば、もう勧誘されないという効果もある。私はすでに一通りの危ないサークルのブラックリストに載っているだろう。まあ、すでに手の内を知っている勧誘にもう一度かかりにいくほど、私も暇じゃないけれど。

「君の指導教官の藤木圭吾が逮捕されたことについて話したいんだが」

聞いたことのないパターンの勧誘だな。

「……はい？」

「ちょっと時間をくれるかな」

そう言って私の前に立ち上がったのは、構内乗り入れ禁止のバイクにまたがって、フルフェイスヘルメットを被ったままの女だった。

怪しすぎる。私は眼鏡をくいと上げた。

え、先生が逮捕されたって？

「……大麻ですか？」

大麻ではなかった。

ヘルメットこそ外したものの、黒のライダースーツだけでかなり目立つ。それがまた身体の曲線を妙に強調する扇情的な感じで、場違いとしか言いようがない。ヘルメットから出てきた顔も西洋人めいて堀が深く目力がある。それは化粧のせいかもしれないけれど、いずれにせよ悪目立ちだ。中途半端な夕方の時間で人もまばらになったキャンパス内の喫茶店だが、周囲からの視線は痛かった。

女は無量と名乗った。なにそれ変な名前。

「こいつは私の助手で、劫っていう」

最初に現れたときは女の影に文字通り隠れて見えなかったけれど、女は助手と称する男の子を連れていた。この子もヘルメットをしていたが、それを取ってしまえば、有名私立小学校に通う少年に見える小綺麗な少年だった。Nバッグとか背負ったら似合うんじゃないか？ しかしさっきから一度も口を開かないし、無表情で、目も合わせてくれない。

「无量さんと、劫さん……数字が多そうなお名前ですね」

言った瞬間に少年の方が舌打ちして顔をしかめた。何このガキ。

「まあそれはよく言われるね」

女はアイスコーヒーを二つオーダーしてこちらを見た。私もそれで、と言った。店員は私たち三人を一秒ずつ眺めて、謎は未だ解けないと言った顔をして戻っていった。私にも解けてないよ

。

「名前を話すると鬼が笑うというけれど、君の名前こそ暗示的じゃないか」

名前を話しても鬼は笑わないよ。

「三ト八恵。命ト占三家の末裔にして名前がまた八恵だなんて縁起がいい。縁起がよすぎてバランスが壊れそう。いやある意味もう壊れてるか」

女は早口で言った。分厚い唇がよく動き、白い歯が覗いた。

「私の名前。知ってるんですね」

私は意識的に、ゆっくりと言った。

「知っている。君が三ト八恵という名前だということを知っている。その名前はあまり気に入っていないから友人にはみとはちと名乗っていることも知っているし、東央大学文学部人文社会学科に在籍していて指導教官が藤木圭吾であることも知っている。しかし藤木圭吾が教授だというのはどう考えても笑えるくらい嘘だし、そのアカデミックな経歴は後付で作られた欺瞞であることを私は知っているし、君も知っている。君がそれを知っていることを私は知っている」

私は押し黙った。店員がアイスコーヒーを六つ運んできた。

「多いよ！」

言った瞬間に少年の方が舌打ちして顔をしかめた。何このガキ。

「いや、私もそれで、って言ったじゃないかお前」

「いや二つ頼んだらあなた達二人の分だと思うでしょ」

「まあそれはよく言われるね」

よく言われるなよ。店員は私たち三人を一秒ずつ眺めて、謎は未だ解けないと言った顔をして戻っていった。お前も謎だよ。私と女はガムシロップとミルクを入れて、少年は何も入れずにアイスコーヒーを一口飲んだ。無表情だった。背伸びしてブラックなんか飲んじゃったけどまずいみたいなのはないのか。可愛げが無いな。思った瞬間に少年が舌打ちして顔をしかめた。声に出してないよ。思考は許してよ。

何の話だっけ。

ああ、藤木先生の話だった。

「……いやあ、だって、あの人の過去の論文とか、色々詰めが甘いじゃないですか？ いまどきその気がなくなっただってとりあえず無断転載しておくサイトが、世の中にはいっぱいありますから、後から所属とか書き換えるの、すぐバレますよ」

「はは、なるほどね」

「それで、何のサークルの勧誘なんでしょう」

明らかに私個人を特定してきている時点で、サークルの勧誘とは思えなかったが。しかしそもそも付き合っているのは、聞いたことのないパターンの勧誘文句だったからなのだ。

「公安警察に不当に逮捕勾留されている藤木圭吾さんを支援する会」

新左翼か？

「私たちは藤木圭吾に借りがある。それを返そうっていうわけだ」

「はあ」

「だから簡単に言えば、簡単に言うと鬼が笑うけれど、君に手伝ってほしいわけだ。君は藤木圭吾の教え子だし、先生を助けたいだろう？」

簡単に言っても鬼は笑わないよ。

「わかっているだろうけれど、君は藤木の教え子の中じゃ唯一まともな人間なんだからね、君に助けてもらわないことには、私たちも動きにくいのだ」

「全然わかりません。そもそも藤木先生が逮捕されたって、本当なんですか」

「疑っている？」

「あの人が逮捕くらいされそうだと思いますが、さすがに唐突ですよ。大麻ならわかりますが」

「藤木圭吾は大麻をやっているのか？」

「いやただの印象ですが」

「学生に大麻の印象を持たれるというのも相当だな」

「私の印象、当たるんですよ。占い得意なので」

「はん」

女は鼻で笑った。少年の方は表情を変えなかった。

「あと研究室の机の中に大麻が入っていました」

「物証じゃねえか」

「神道の講義で使うんだと思いますが」

「……そういうのルビが表示できる環境でやらないと通じないぞ」

大麻。おおぬさ。

「藤木圭吾は昨日日本に帰国したが、成田空港で入国直後に逮捕されている。容疑は大麻とかではない。無登録の人造妖異による傷害だけどこれは別件逮捕というか微罪逮捕というか、まあともかく不当なものだ」

実際のところ藤木センセーから時々大麻くさいにおいがしていたのは事実なので、薬物での逮捕でなかったのは良かったと言うべきだろう。しかし、その傷害というのがどれくらい傷害なのかわからないが、微罪逮捕だと主張するあたり本当に思想系っぽいなあ。仮にそれが本当だとして、私に何をしろっていうんだ。

「簡単な話だし、それにただで助けてくれなんて言わない。見返りに、君が何よりも好きなやつをあげよう」

「なんですか」

「妖怪についての話だ」

「……妖怪？」

「だってそうだろう？ 君は妖怪とか研究している学生なんじゃないの？」

偏見に違いなかったが、あながち間違ってもいないのが難しいところだ。

「だからこの話を、家に帰ったら――」

飲み終えたアイスコーヒーの氷がカタリと音を立てる。

「日記に書いてほしいんだ」

私は黙る。

「ほんと君は、落ち着いているね。動揺が全く見えない。動揺してしかるべきシーンなのに」

「どういうことです」

私は落ち着いた声音で言う。少しそれが過ぎて、声が低くなってしまったかなと思う。

「別に。カマをかけただけさ。ただ日記が一番いいね。ブログとかツイッターとかになってくると、足がつきやすい。非公開が一番さ」

私は確かに日記を書いているけれど、書いているけれど。そこに書くということは。

「君に書いてほしい話は、この大学にまつわる蛇の話なんだ」

女は語る。

7 (占)

帰宅すると、はるかは風呂に入っているところだった。私ははるかが消えていないことに安堵する。

はるかがこの家に転がり込んでから、もう半年以上になる。こんな生活を半年も続けて、平然としている私たちは、どこかで間違えている。はるかはきっと、実家には帰っていないどころか、連絡すらしていないに違いない。だって、それは出来ないはずだ。私はそれを知っている。知ってしまっている。そんなことは知りたくなかったのに、知ってしまっていて、そうしてそのことを隠している。見て見ぬふりをしている。傲慢で、ひとりよがりだ。はるかとうとうとふたりで暮らすことなんて、できるはずがない。許されない。そのことを思うときの後ろ暗さを、私は打ち消しながら、風呂に急襲した。

「おかえりー、ってえええ！」

めっちゃお湯かけられた。

「いきなり開けないでよ！」

「いきなりじゃないと開ける意味が無いからねえ」

「あるよ！」

「あるの？」

「……八恵の馬鹿！」

そう私は馬鹿なので、濡れた服を着替えると机に向かってしまう。はるかと一緒に風呂に入ったことはない。だってそれはどうしたって、見えすぎてしまうじゃないか。ゲームの中みたいに、一晩で一人しか占えないとか、そういうルールがあるわけでもないけれど。だから狩人を占って無駄な消費だとか、そういう話じゃないけれど。でもなんでも見れば良いってものじゃない。

風呂場から、まだはるかがぶつぶつ言っているが、だからこそ机に向き合えるのは今のうちだ。

大昔の律令国家では、卜部たちが亀卜によってまつりごとを占ったという。亀の甲羅を使って行う亀卜は、実は具体的にどうやるのか、よく分かっていない。国家の占い専門集団であった卜部は、亀卜の手法を秘匿し、文字に残さなかった。亀の甲羅を炙ってヒビ割れを見るという説が有力だが、熱した鑿で叩くという説や、熱した木片を押し当てるとい説もある。そもそも前工程として印を彫り込む工程があるという説がある一方で、それは予め占いの結果を操作するためのからくりで、後世の創作だという説もある。最終的に甲羅の割れた文様をどのように読み解くかも異説が多数存在し、定まらない。

占いは道楽ではなく、彼らにとって食い扶持だった。雇われ占い師にとっては、その占いの手法こそが生命の源泉であって、一子相伝、絶対に守らねばならない秘密だったのだろう。

私は別に、一子相伝とかじゃあないけれど。けれど、自分の占いの内容を、方法を、人に話したことはない。

それだけに。あの女、無量が思わせぶりに日記について語ったことが、私を不安にさせる。

しかし、まあ言われなくても日記なのだから、今日起こったことを書くのは自然なことだ。書けと言われなくても、聞いた話を書くことに違和感はない。そう思って私は素早くキーボードを叩きはじめる。実は日記帳である必要はなく、要は文章を書くという行為があれば問題はない。言葉を形にしていく瞬間、私は未来の言葉が見える。過去から積もってきた日記の言葉の向こうに、未来に書き込まれるべき内容までもが視えてしまう。

私は書く。

私は刻む。

亀の甲羅でも羊の皮でもなく、キーボードと画面に。

今日あったこと、考えたこと、伝えられたこと。

鬼が出るか蛇が出るか。

無量の話を書き終える瞬間、私に視えたのはどちらだったか。

ゼミ室への階段を登りつめると、微かに心臓がはずみました。地味にきつい階段を登ったせいなのか、自主ゼミへの期待か、定かではありませんが。

そうそう、私の心内語が何処かで小説になっているかもしれませんし、ひょっとするとそれが時系列を遡ったエピソードということもありましょから、このあたりで一度言明しておいたほうが親切でしょう。今日は四月十六日。自主ゼミの第二回です。あ、そうそう、私は稲荷木燈花と言います。読者の皆さん、聞こえてますか？

到着したのは私が最後だったようでした。すでにゼミ室には、メンバーの三人が揃っています。

ぼーっとパーマの掛かった髪を弄っているのは、小さな体にボスっぽい風格の漂うみとはちさん。みとはちというのはあだ名だそうですが、本名は忘れまして。草苺さんが八恵と読んでるので、下の名前は八恵なのかもしれませんが。ということは、名字は水戸ですかね？ まあどうでもいいですけど。

対照的に背筋をぴっと伸ばして凜とした雰囲気のを漂わせている草苺さん。この方は、不思議な透明感を持っています。芯のある人だと思いますが、同時にどこか、違う世界から来てしまったような雰囲気をたたえている人です。そうはいっても、私が見る限り、中身は単にみとはちさんにベタ惚れして依存しているだけの人ですが……。しかし、みとはちさんと二人並ぶと身長差結構ありますね。四人がけソファなのにみとはちさんと密着しすぎじゃないですか？ まあなんか二人でやっててくださいという感じがします。

そして香織は、部屋の端の水屋スペースでちょうど紅茶を入れているところだったようです。ピーチとクリームの香りがします。

「おはよう」

香織が振り返って言います。また角襟の服着てる、と私は思いました。

「おはようございます」

「おはよー、燈花ちゃん」

みとはちさんが眠そうに言いました。

「揃ったね」

妙な経緯で始まったこの自主ゼミですが、私は結構、気に入っています。もちろん学術的な広さや深さで言えば、藤木先生がいるほうが良いのですが、学生だけというのも自由な雰囲気があります。そのなかで、先輩二人や香織の考え方や、興味を持つポイントが分かるのは、単純に楽しいのです。

「それじゃあね、今日のテーマはこれ」

みとはちさんが、じゃじゃん、と言いながらレジュメを配りました。

*

藤木ゼミ 自主ゼミ

担当 みとはち

二〇xx年四月十六日

本学における『蛇塚』について

工学部一号館前の広場には多数のオブジェや展示物があるが、大半は一九九八年の周辺整備の際に設置されたものである。しかしながら、その隅にひっそりと佇む『蛇塚』は、それよりも遙かに長い歴史を持つと言われている。今回は、この『蛇塚』にまつわる由緒、逸話、都市伝説を概観し、分析していきたい（願望）。

蛇塚の基本情報

一般に蛇塚と呼ばれているが、東央大学キャンスマップによれば「お化け灯籠」という表記になっている。お化け灯籠といえば上野恩賜公園の巨大な灯籠（高さ6メートル）が有名だが、こちらは高さ1メートル強の一般的な灯籠サイズである。きれいなお椀型の笠で、蕨手（笠の周辺につく突起のような装飾）はなく、火袋に灯火が入るスペースはない。竿は単なる円柱で、装飾も気もなく、独特の雰囲気なたたえている。基礎部分は四角で、そこに「蛇體姫」との文字が刻まれていることから、蛇塚との呼び名があるのだろう。なるほど確かに、灯籠のようにも見えるが、火袋にスペースすら確保されていない点で、これは灯籠かと言えば怪しい。蛇塚という俗称のほうが正体に近いように思われ、本稿では蛇塚と呼称する。

東央大学新入生ガイドのバックナンバーを確認したところ、蛇塚の由緒が確認できた。ただし、内容を読んで分かる通り、怪談・都市伝説の域を出ないものである。以下、引用する。

（引用ここから）

蛇塚

工学部一号館前のイチヨウの木の横にある蛇塚は、もともと加賀藩の大名屋敷にあったものであるという。御存知の通り、東央大学の土地はかつて加賀藩前田家上屋敷跡であった（本学の正門も、もとはこの上屋敷の一部が復元されたものである）。この上屋敷に「きぬ」という女中がいたが、これがあるとき留守居役と密通していたとして騒ぎになり、首を吊って死んでしまった。その直後から屋敷の中で物が飛んだり、屋根に小石が降り注いだりといった怪異現象が起きるようになった。女中たちが、きぬが首を吊った女部屋で寝ると身体中に蛇に巻きつかれたような跡がつくというので、蛇憑きだったに違いないということになり、祈祷をしたうえでこの塚を立て、霊を慰めたところ、怪異現象が治まったという。

時代を超え、この土地が東央大学キャンパスとなってからも、蛇塚はひっそりと祀られていたが、五年ほど前にキャンパス内で泥酔した男子学生が蛇塚に粗相をするという事件があった。その後、男子学生が急死したために、蛇の祟りであると言われている。以来、深夜の工学部一号館前にはこの男子学生の霊が出るという噂だ。その晩、共に飲んでいた友人たちを探しているのだとか。自分が死んだと知るやお祓いに駆け込んで、蛇塚のことなど忘れて生活している友人たちが許せないのかもしれない。新入生諸君も蛇塚と飲み過ぎには注意しよう。なお、工学部一号館の夜間通用口が建物裏側が変わったのは男子学生の霊の目撃が相次いだからだそうである。夜間にキャンパスから出る場合、工学部生は西門から出入りするよう心がけたい。男子学生の霊に追いかけられると、数日は背中に蛇に巻きつかれたような跡が取れないそうである。

(引用ここまで)

考察はせっかくだし皆でやろうぜ。

*

「面白いだろう！」

みとはちさんが叫びました。その自信は小さな身体はどこから来るのですか。

「確かに、面白いですね……」

香織が言いました。でも香織の言う通りで、この資料の話に興味を引かれないと言えは嘘になります。歴史のあるキャンパスだという認識を持ってはいましたが、こんな伝説じみたものが近くにあるとは考えたことがなかったのです。工学部一号館前の広場と言えは、この文学部一号館の裏側すぐなわけですし、私も通ったことがあります。もしかしたら蛇塚を見てすらいるかもしれません。

「うーん、これはつまり都市伝説を考察しようという提案だよ。うちのゼミ的に若干外れるような気が」

ただ、草苺さんが言うことにも一理あります。都市伝説や怪談も立派な学術的議論の対象たりえますが、私たちはそういう集まりでしたっけ。

「えーいいじゃん面白いし。せっかくレジュメ作ってきてし。だいたいうちのボスの専門だって怪しい系だし。このゼミの存在も都市伝説みたいなもんだし」

このゼミは都市伝説みたいなもんじゃないです。多分。

用語法は時代や学派によってそれぞれですが、伝説というのは、民話や昔話と比べると多少の信憑性を持って語られるものとされています。実在する人物に関するものであったり、特定の時期が設定されていたりと、少なくとも語る側は、それなりに真実であると思って語るのです。『むかしむかし、あるところに』の昔話とは正反対の特徴です。

それが一般的な『伝説』という用語への定義付けですが、そこに『都市』とつけると、意味はややずれて来ます。都市伝説は現代、それこそ都市の時代において口承される話であり、信憑性

は薄れてきます。登場人物が『友達の友達』とかであることは多いし、語る人々も本心から信じているのではなく、よりゴシップ的に語るようになります。みとはちさんが引用した文章の後半はまさにそれであり、蛇塚に粗相をして急死したという学生が本当にいたのか不明ですし、この筆者が男子学生の幽霊を見たわけでもなさそうです。

とはいえ、語りたい、伝えたいという欲求があるから人間は語ります。その点では古典的伝説も現代的都市伝説も、根っこに存在する人間の心は同じなのかもしれません。

「怪談の部分はともかく、そういう塚が実物としてこのキャンパスにあるなら、それはちょっと気になります」

香織がそう言って、私も頷いたので、なんとなくこの話題を今日のテーマにすることが決まりました。草苺さんも若干渋々ですが、頷きます。

「そうと決まれば、現地調査に行きますか」

そうして私たちは階段を降ります。怪談はともかく、フィールドワークだなんて、楽しそうですね？

ホットサンドメーカーでホットサンドを作る。まずホットサンドメーカーの片面を利用して目玉焼きを半熟めに作り、マーガリンを塗ったパンとハムとチーズの上にそれを載せて、マヨネーズを適当にかけ、上からパンをかぶせて、ホットサンドメーカーの反対側を取り付けて挟む。両面を弱火でじっくり焼いて、簡単出来上がりである。

ホットサンドはガッチリ二枚のパンを固着させることで、マーガリンとかジャムとか塗った面が露出しないので、万が一落としてもマーフィーの法則に従って落ちずに空中で回転し続ける。この回転力は再生可能エネルギーの一つとして将来を期待されている。

「期待されてないよ」

背後からはるかの声がした。

「おはよ。もうできるよ」

「ありがと」

二人とも一限は無いので、朝はゆっくりだ。

そのうちにいいにおいができて、ホットサンドが出来上がる。六枚切り二枚で作ったホットサンドは結構ボリュームがあるので、二人で半分にするちょうどいいのだ。

「ところではるか。一枚切り食パンっていうのは、あるのかな」

「耳だけ切ったら一枚切りなんじゃない」

「ゼロ枚切りは？」

「発散する」

「n枚切りっていう単位は、一斤を何分割するか、だからある意味で尺貫法の補助単位なわけだけど、SI単位原理主義者はn枚切りって言葉も使わないのかなあ」

「使うと思うけど、そもそもSI単位原理主義者って何」

「食パンの食って自明だから省略できると思う？」

「できない……」

優雅な朝だった。

はるかは眠そうな目と跳ねた髪でコーヒーを淹れてくれて、二人で飲んだ。

「あ、そうではるか。うちの大学に蛇塚ってあるの知ってる？」

自主ゼミのネタにどうかな、と思ったのだ。この間の、燈花ちゃんが持ってきた都市伝説みたいな話題でもゼミは盛り上がるということがわかったから、蛇塚もいけるんじゃない、と思っただけで、何の気なしに発した言葉だった。

しかし、その質問は間違いだった。

間違いなく、間違いだった。間違いようがなく間違っていて、場違いに間違っていて、紛れもなく間違っていて、見違えて間違っていた。ほんの一瞬前まで眠そうだったはずのはるかの表情が、過冷却した水みたいにぴしりと凍りつき、怪訝に歪む。

「蛇塚……？」

やってしまった。

恐ろしく冷たい声だった。冷たいどころか、皮膚が切り裂かれてしまいそうに痛い。氷の塊に拳を突っ込んだみたいだ。

「う、うん。工学部一号館のどこにあるらしいんだけど」

どこで何を間違えたのか必死に考える。何の気なしに蛇塚の話を出したが、これは昨日、あのライダーズスーツの変な女に教えてもらった都市伝説チックな話で、別に不適切な話題ではないはずだ。考えろ。それとも女か。あれとお茶したのが咎められている？ いや、違う。多分そういうことではない。

「工学部一号館の前の広場にある蛇塚……」

はるかが据わった目で言った。考えろ。何を間違えた。

「ねえ、八恵。それって、占いと関係のある話？」

頭が熱い。首筋に汗をかいているのを感じる。

「いや、占いは関係ないじゃん……？」

占い師の真贋を気にしすぎると、持っている能力が透けるよ。だからその話はやめてくれ。

「じゃあ……先月の自主ゼミで、八恵が持ってきた資料は何？」

先月の自主ゼミ。

四月十六日、自主ゼミの第二回。

私の持っていったテーマは。

私の持っていた資料は。

蛇塚……？

記憶の濁流が氾濫し、私ははるかをまともに見つめ返してしまう。眼鏡のレンズ越しのややぼやけた彼女の顔を、食い入るように見つめてしまう。

だってそれはおかしいのだ。

たった数十秒前に私はこう思ったはずではないか。

この間の、燈花ちゃんが持ってきた都市伝説みたいな話題でもゼミは盛り上がるということがわかったから、蛇塚もいけるんじゃない。

だが私の記憶はそれと矛盾している。四月十六日の自主ゼミに、私は確かにこの蛇塚の話を持っていつている。その記憶がある。蛇塚の由縁について議論し、実物を皆で見物に行き、香織っちがその形状の謎を推理した。

同時に燈花ちゃんが都市伝説を持ってきた時にこれ都市伝説じゃんみたいな話をしたことも覚えている。この二つの記憶は矛盾している。

もし私の回の時にすでに都市伝説をやっていたのなら、燈花ちゃんの回の時に、それが都市伝説であることに反応したりしないはずだ。

どういうことだ。私は自分がゼミに提供したそのネタの事を何故か忘れており、あの無量という女に言われてそれを初めて知ったように感じたというのか。

「……ああ、そっかあ、勘違いしてた。蛇塚の話、してたねえ。四月に」

はるかは不審な目で私を眺め回していた。身体が熱く、汗が噴き出す。言い訳が苦しすぎる。絶対にありえないレベルの記憶違い。……いや、これは記憶違いなのか？

「最近、あの蛇男の話、何度か聞いたわ」

やや間があって、はるかが言った。その目はもう据わってはいない。

「……蛇男？」

「蛇塚の祟りで死んで、幽霊になって出てるっていうやつ。最近追いかけられたって人が、結構いるのよ」

「へえ……あの話って結構昔に流行ったんだと思ってたけど」

話が逸れそうで、私は安堵する。

「それが連休あたりから再燃してるみたい。社会基盤の知り合いが言ってたわ」

「弓の知り合い？」

はるかは弓道サークルに入っている。

「そう。社会技術学で一緒だから」

私は人のこと言えたものじゃないけど、はるかは未だに変な授業を取っている。まあ、そもそも私とはるかが知り合ったのだから、文系の一年のくせに基礎実験を取っていた者同士、という仲なのだ。そもそも普通は文系の必修と被ってしまうはず。バグ技みたいな方法で履修していた。

はるかがサークルの知り合いと話をするくらいの間人間関係を保っていることには安心するけれど、ここでわざわざ授業の名前が出てくるのも溜息ではある。はるかがここで暮らし始めてから、彼女は学校以外ほとんど家を出ていない。サークルの集まりとか、きっとあると思うのだが。

「その人が追いかけられたって？」

「あくまで噂。追いかけられたっていう話は、あくまで知り合いが、知り合いの知り合いが、ってやつ。でもその子も、それらしいのを見かけたとは言ってた」

「それらしいの」

「フードをかぶってて顔がよく見えないんだけど、通り過ぎる時に蛇の鱗みたいな肌が見えたんだって」

まあ、それだけじゃ普通に、何か皮膚炎とか、皮膚に健康上の問題を抱えた人がいたというだけかもしれない、それ以前に見間違いかもしれないくらいで、なんでもない話だ。

「そう。八恵の言う通り。なんでもない話だと私も思う。ただ、この噂がそれなりに盛り上がっているらしいっていうのが、私はちょっと気になるのよね」

「盛り上がってるんだ？」

「追いかけられたっていう人が正門の警備室に駆け込んだらしいの。幽霊だったかはともかく、不審者騒ぎっていう扱いで、警備員が増員されたりしてるのよ」

「へえ……」

それは全然知らなかった。大学の警備員と言えば、愛想のいいおじさんの印象しかない。1限どころか2限も捨てて昼になって登校してくる学生に元気よく挨拶し、3限サボって街に繰り出していく学生にも元気よく挨拶し、ともかくすべてを赦してくれる菩薩である。不審者と戦うと

いう姿は浮かばなかった。

「タイミングが良すぎると思わない？」

「何の？」

「わたしたちの自主ゼミで蛇塚の話を取ってから、それに関連する怪談が、巷で噂になっている」

「ふうむ……」

話の行き着く先が見えてしまう。マグカップを持ち上げて、しかしそこにもうコーヒーは入っていない。今朝のコーヒーは、普通に一人一杯だったからだ。

「香織っちや燈花ちゃんが、友達に話したのかなあ」

「そうかもしれないわね。今度聞いてみましょう」

私は空になったマグカップを弄ぶ。それは何も答えてはくれない。

「ちなみに私は、誰かにあの自主ゼミの内容を話したりはしていないわ。八恵は？」

「……私も」

それは本当で、何しろ私は昨日まで、その話を知らなかったのだ。いや、知らなかったはずなのだ。

「ねえ、それなら教えてほしいんだけど、八恵はあの蛇塚の話、どこで知ったの？」

それは合理的な推理だ。

ゼミのメンバー四人から噂が拡散して行って、工学部生の中で話題になり、実際に幽霊の目撃者が出ている、というのはあまり現実的とはいえない。だってそれは、さすがに速すぎる。そんなに爆発的に噂が拡散したりはしない。口裂け女級のスピードじゃないか。それよりも、工学部生たちと私に、共通の話の出処があった、と考えたほうが妥当だ。

では、その話の出処とはどこか。

私にとってそれは、昨日、キャンパス内で声をかけられた怪しい女である。

けれどそれは時空が歪んでいる。私がゼミに資料を持っていったのは四月だ。どうして昨日知った話が、ゼミの時点で分かっていたというのか。それじゃあまるで……。

「ねえ八恵。私に何を隠しているの？」

木霊するその問を、私はまた反芻している。

私はベッドに眠る親友を見下ろして、その頬を撫でた。

「私は、あなた達に何もかもを隠している」

1 (狼)

「燈花はよく運転するの……」

「いえ、時々週末に買い物に行く時に、この車を運転させてもらっているだけです」

運転席に燈花が座り、僕は助手席にいた。イエローのアクアが橋を渡って、多摩川を越える。アクアというのはいかにも燈花のお父さんが選びだそうだけれど、イエローは選ばないだろう。二色さんか、もしかしたら燈花の意見も反映されているのかもしれない。比較的生活感とでも言うものが少ない車内で、流れているのもラジオだけれど、それでも僕はこの車が、石狩鍋を食べさせてもらったあの居間よりも増して、家族のための空間という風を感じてしまい、居心地のよさと居心地の悪さを同時に味わっていた。助手席のトレイに伏見稻荷大社の交通安全お守りが置かれていてじわじわきた。

昨日、燈花のお父さんの運転でこの車に乗ったときより、もちろん燈花と二人の方が、変な緊張はしない。しかしそうは言っても、僕は不安定な気持ちだった。

「今回は私が運転しますから、大丈夫ですよ」

僕は二年前に免許だけは取ったもののその後全くハンドルを握っていない。燈花に任せておいたほうが安心ではある。けれどこれだけのロングドライブを、燈花に任せっきりというのも、なんだか申し訳なくて落ち着かないのだが。

「そうは言っても、実質一日三時間くらいしか移動しないわけですから」

一日三時間、朝だけの移動。

狩人たちが動かない、朝のうちだけを利用して、二人で北へ逃避行。十日間。

「それに、そもそも元を正せば、私のせいでこんなことになっているのです」

そんなことはない、と言いたかったが、実際のところ、元はと言えば燈花が僕に化けたのがきっかけではあった。だから僕は、かわりに言った。

「大丈夫、嫌じゃないから」

2 (狼)

目的地は、六峰山という山。なんでも北海道は石狩にあるらしい。え、石狩伏線だったの？ その山頂にある神社が、僕の狼を預かってくれるのだという。神職を見つけてくれたのは燈花のお父さんだ。

「昔の知り合いから情報がもらえてね。もう少し近いところでも適任はいそうに思うけれど、あまりおおっぴらに探すのもまずい。移動さえクリアできれば、問題ないはずだ」

僕がお尋ね者だというのなら、燈眞さんは仕事上、僕を通報する義務すらあるはずだ。家に匿ってくれ、問題の解決策まで探してきてくれて、本当に頭が上がらない。

お尋ねものは僕ではなく、厳密に言えば僕が背負っている狼だ。だからこの狼を捨ててしまえば、とりあえず安全になる。

とはいえこの狼の札は、誰でも剥がせると言うものではない。だから、公権力と無縁で、ある程度信頼できて、狼を扱えそうな人が必要だった。職場の備品さえ使えば、自分が無理やり剥がすこともできるが、と燈眞さんは言ったけれど、そこまでの迷惑はかけられませんかと僕は固辞した。

「まあ、そうだね。その藤木先生という人が用意した御札なんだろう？ その人が逮捕されたというのなら、いま職を追われるのは良い判断じゃないだろう。職場から情報を探ってみるよ」

「いや、そういうことでなく……。僕なんかのためにこんなに……」

車まで貸してくれると言う燈眞さんに、もう僕は何も言えなかった。

「気にしないで。別に仕事に迷惑もかからない。困っている人を助けるのがこの仕事だから」

そうして燈眞さんは、僕にだけ聞こえるように、こっそりと付け加えた。

「それに、君は燈花が初めて家に連れてきた友達だからね」

燈眞さんはそう言って、父親の顔で微笑んだ。

狩人をはじめとする公安の活動時間は昼から未明までと言われている。朝というのは一般に、明るくて、明晰で、明瞭で、怪しい出来事は起こりにくい。変なモノが現れるのは、第一に逢魔が時、そうでなければ丑三つ時と相場が決まっている。朝はそれらから最も離れた時間帯だ。故に、朝が彼らの交代時間になっているのだとか。だから僕たちは、朝にだけ移動する。

宇都宮の適当なビジネスホテルについたのは完全に昼で、普通はチェックイン3時からのところを、頼んで入れてもらった。まあ、普通のビジネスホテルと言った感じの、部屋がベッドで埋まっている空間だった。

「え？」

燈花が首を傾げた。

「どうかしましたか？」

「いや、ベッド一つじゃん」

「は？」

「え？」

「……いや、香織はひょっとして、私がタダでドライバーをやるためについてきたと思ってるんですか？」

「下心がひどすぎる」

燈花がかばんをゴソゴソと探り、御札のような物を取り出して、部屋の入り口のドアに貼り付けた。読めない文字で何事か書いてある。

「なんて書いてあるの」

「ドゥーノートディスターブ」

「普通の札じゃん」

「こっちの小さい字は、『エコカード（シーツ交換不要）』と書いてあります」

「それ外に向けて貼るやつじゃん」

絶対書いてないだろう、それ。

「父に借りました。狩人除けに、おまじない程度の効果はあるそうです」

「なるほど」

「昼と夜の間、これを貼って引きこもってれば、基本的には安全だろうということです。午前中しか移動しないこと、ホテルについたらこれを貼り付けること、移動の前後に毎日連絡を入れること。これを守る条件で、私が香織を送っていくのを許してもらいました」

「そっか」

すとな、と沈黙が落ちた。

どこかの配管か空調かなにかの低い音が微かに流れる。それ以外、不気味なくらい音がしない。燈花は無音でこちらに向き直った。

「さて」

一歩近づいた。

「さて？」

「どうやって時間を潰しましょうか？」

確かに、今更ながらそれは問題な気がした。目的地につくまで十日間もかかる。外に出られないのなら楽しく観光というわけにもいかない。時計をもう一度見たが、さっきから三分くらいしか進んでいない。まだ昼だ。

「昼は長いですよ……」

燈花がにじり寄ってきて、僕はそれ以上後ろに下がれなくなった。後ろにベッドがあった。

「ちなみにドアに貼った札ですが、音響遮蔽の効果もあるそうです」

「は？」

「声を気にしなくても大丈夫ということです」

「おい」

「香織、狼狽していますね？」

「え……」

「狼だけに」

これ言いたかったんですよ、みたいな顔で言うのをやめろ。

3 (占)

このあいだ燈花ちゃんに説教じみたことを言ったのを思い出していた。端的に言って死にたい。

なんか、ひとりよがりですべて相手のことを考えるのではなくて、直接対話すべきだ、みたいなことを言った気がする。

偉そうに。

何でもお見通しだとでも言うように。

占い師みたいに。

自分はどうだということか。私はずるい。推理したことを無邪気に私に話した燈花ちゃんよりも、さらにたちが悪い。なんにも知らないふりをして、知っていることを隠して、この生活を続けている。

先日メールしたところでは、燈花ちゃんはその後、香織っちと二人で愛の逃避行（原文ママ）に出ているらしい。意味がわからないが、二人が仲直り出来たのなら良いことだろう。

最近の私は、自己嫌悪で忙しかったが、混乱でも忙しかった。先日の変な女の一件。無量と名乗る女から聞いた蛇塚の話を日記に書いたら、いつの間にかその話は、一ヶ月前に自分がゼミで披露した話になっていた、という現象である。

私の記憶がおかしくなっている可能性も、もちろん否定は出来ないが、どちらかと言えばこれは、過去の改変に近いものではないかと思う。

そもそも私は、占いらしい占いはしない。やり方も教わっていないし、学ぶこと自体、拒絶した。けれども私は、強制的に視えてしまう性質を持って生まれてきた。人の顔を見れば、その命が、運命が視えてしまう。それはちょっとした地獄だ。祖父の死期を言い当てた私を、両親は鬼の子を見るように見た。もうそういうのがいやになって、面倒くさいので、でたらめな度の眼鏡をかけるようにした。これが結構よくて、全然何も視えやしないのだ。

占い師というのは損な役回りだ。基本的にCOしないといけない役職だし、責任は重大だし、皆からは疑われるし、何も良いことなんてない。いっそ視えなくなってしまうと私は思ったのだ。静かに仕事ができる狩人の方が、私は羨ましい。前にその話をはるかにした時、はるかも同意してくれた。

「私は、誰かを守ることができる狩人の方が、自分には合っていると思うな」

けれど彼女はこうも言ったのだ。

「でも、守るべき占い師が側にいてくれないと、狩人もなかなか、寂しいものよ」

何の話だったか。ああ、見えない眼鏡を変えて、運命が視えなくなった私の話だ。

日記を書いている際に、未来に日記に書かれる事柄が見えるようになったのは、それ以来である。文章を激しく書きなぐったり、あるいはキーボードで打ち込んだりしている時に、ふとその向こうが見える。将来書かれるべき文章が、今書いている文章に重なり、私のなかに入って

くる。

おそらく、私の血筋が、私の占いの力が、行き場を失って溢れ出しているのだろう。日記による未来予知は、見えるのが特定の人のことではないという点で、また少なくとも未来に自分自身が日記に書く事柄しか見えないという点で、そこまで不快ではなかった。それでもずるをしているという感覚はあったけれど、日記を書くのもやめてしまったら、こんどはどんな形で占いが発現しだすか分からないと思った。日記ならまだ、ましなほうじゃないか。そう思った。

私は日記で未来を知ることができると気付いてから、しかしそれを適当にやり過ごし、厳密に考えようとはしなかった。

しかし、蛇塚の一件は、さすがに考えを改めさせるに充分だった。

この力は、逆方向にも使いうる。

すなわち、過去に伝えたい情報を日記に書き込めば、うまくすれば過去の自分がそれを、読んでくれるかもしれない。過去の私が、現在の私が書き込んだ蛇塚の話を読んで、それをゼミに持っていったように。

これは使えるかもしれない、と私は思う。ずるい私は、考える。私のしてしまっていること、現在進行形で重ねている罪。これをなんとか出来ないだろうか……。

「おい」

突然声をかけられて、私は立ち上がり後ろを向いた。そこには、背の低い私よりもさらに背の低い、小学生くらいの男の子が立っていた。

「あれ、こないだの」

この間、怪しい女と一緒にいた少年だ。確か名前は。

「劫くん、だっけ」

「気安く呼ぶな」

少年はマジで不快そうな顔をした。小生意気な子供らしい可愛さとかじゃなくてマジで不快そうな顔だったので殴ろうかと思った。殴るのはよくない。

「今日は一人？ お姉さんは？」

「一人だ」

「一人で偉いね。どうしたの？」

少年は舌打ちして顔をしかめた。

「子供扱いするな」

「子供でしようが」

実際、一人の様子だったし、一人になってみれば、案外普通の子供のように見えた。無量さんはこの子を助手だと言っていたけれど、それはどういう関係なんだろうか。無量さんが何か仕事をしているとして、こんな子供を助手として働かせたら児童労働だろう。

「伝言があってきた」

「伝言？ 無量さんからの？」

少年は頷いた。

「『君が日記にきちんと書いてくれたお陰で、何もかも順調に進行している』」

若干作った声だった。

「え、モノマネで伝えるの？」

「『藤木圭吾の解放のために、もう一歩だ。そこで今晚、少し君の身体を貸してほしい』」

若干手振りがついていた。プロ根性か？

「『今晚0時に、工学部一号館前の広場まで来てほしい。ついたら電話してくれ』」

「……助手の仕事も大変だね」

少年は舌打ちして顔をしかめた。

「これ」

少年が何かを差し出した。

「姉ちゃんの連絡先だよ」

姉ちゃんとか呼んでるの、かわいいな、とか言ったらまた怒りそうだなと思ったので口には出さなかった。少年は舌打ちして顔をしかめた。口に出してないのに……。

受け取ったのは名刺だった。こう書かれていた。

(宮) 塚田農場

部長 無量 蓮美

「塚田農場じゃねえか！」

デコられていた。部長とかそれなりに通ってんじゃない。ってというか塚田農場の名刺にフルネームを書かせるな。

「そういうわけで、今夜決行だから」

「いや、どういうわけだよ。工学部一号館前って、そんなところで夜中に何するって」

「来るだけでいい。お前に何かしてもらう必要があるなら、お姉ちゃんはそう言うはずだから」

「お姉ちゃんとか呼んでるの、かわいいな」

少年は舌打ちして顔をしかめた。口に出したのに……。

「ともかく、0時に工学部一号館前に来て、その番号に電話しろ」

「いや、この番号に電話しても塚田農場新橋レンガ通り店にかかるとは思いますが」

「その時間は姉ちゃんの携帯に繋がるように細工しておく」

「そんな細工をしてまで塚田農場の名刺を渡すって言うギャグがやりたかったのか？」

「ギャグでもなきゃやってられないんだよ」

少年は私に背を向ける。

「国家権力に反逆しようって言うんだから」

4 (占)

少年を見送ってからも私は、しばらく病室で親友の寝顔を見つめていたけれど、面会時間も終わってしまい、手持ち無沙汰の私はふらふらと大学に戻り、そこからさらに図書館で限界まで粘った。テスト前でもない図書館だから、さすがに夜は人も減る。いつもは効きの悪い空調も、これだけ無人ならばさすがに気にならず、けれどどこか粘ついている空気にまとわりつかれながら私はぼんやりと本を読んでいた。蛇の本だった。蛇性の淫しかり、蛇には性的なイメージもつきまとう。それを、「蛇は穴に入りたがる性質があるから、そこに性的なイメージが見出されたのだろう」と言い切っている本だったので、ちょっと安直すぎないかと私は笑ってしまった。中学生か。図書館職員に追い出されたあとはゼミ室に籠城する。十一時になると警備員がやってくるので、電気を消してやり過ごす。戸口からは見えないようにソファに横たわっていると、懐中電灯のライトが室内を一周したあと、扉が閉められて、警備員は行ってしまう。私はその後も、しばらく暗闇の中でじっとしている。窓の外は曇天、月明かり。スマホで時間を見ると、液晶のバックライトが目痛い。0時に集合ならば、まだ今少し、ここで時間を潰さねばなるまい。理系の研究室だったら寝袋常設が当たり前だというのに、十一時施錠というのは世知辛い話だと思う。

と。

廊下で音がする。

警備員が戻ってきたのかと思ったが、何かが違う。

その音は、ずるり、ずるり、と何か重いものを引きずるような。

重い身体を引きずるような。

私はソファの上で微動だにせず、目だけを開いて音を聞く。重いものを引きずる音は、間断なく聞こえる。ずるり、ずるりというよりも、ずりずりずりと言ったほうが適切かも知れない。誰かが何かを、運び入れたり、あるいは運び出したりしているのだろうか。土嚢か。木樽か。あるいは血糊のこびりついた死体か。この時間に？ 学生の悪戯、泥棒、殺人鬼、と可能性を挙げてみるけれど、いや、どれもじっくりこない。気付いている。本当は。感づいている。本当に？ 窓の外は月明かりは隠れてしまった。全神経を廊下から漂う寒気に向け、背中に向けて、息を止め、その間も音はだんだん近づき、今まさにこのゼミ室の前を通過している、という音量になった。

違う種類の音が聞こえる。

それはシュウシュウと。喋るように。

まるで――

場違いに軽快な電子音が手の中で鳴り、私は飛び上がる。見ればスマホに、はるかから了解の返事が来ていた。心臓が痛い。スマホを握りつぶさんやにして耳をすませば、廊下の音は消えている。漂っていた寒気は消え、ドアの外には何もいないであろうと知れる。私はじっとりと汗をかいているのを今更のように感じる。

窓の外は曇天、月明かり。

時計を見ると0時が近かった。そろそろここを出よう。

終電もじきになくなる時間である。はるかに何と言いつけるかが問題だったが、適当に親戚を殺した。急に田舎に帰らないといけなくなったと言った。すまん親戚。中途半端に友達がとか飲み会がとか言って外泊をでっち上げると、逆に面倒なことになりそうだったからだ。ただでさえ帰りが遅いと機嫌が悪い。家に帰らないともものすごい怒る。村陣営なら誰だって、占い師の所在が知れないのは不安なのかもしれないと私は思う。ましてや、はるかなら。前に一度、自分だって実家に帰ってないじゃないかと言いつけてしまった事があるのだが、激怒されたうえに号泣された。そんなに八恵は私を追い出したいんだ、とか言われて、弱った。今回も何か追求があるかと思ったが、了解の返事が来たのでとりあえずなんとかなったようだった。

私はソファから改めて起き上がり、窓を開けた。月明かりはスマホの明かりと違って目に痛くない。

なんだってこんな、明らかに怪しい呼び出しに私は応じているのだろう。怪しいカルトサークルや思想系サークルの勧誘にホイホイついて行って、その正体を見定めていたのと同じだろうか。違う気もする。

工学部一号館前。

それこそが、無量に聞かされた話の舞台であり、ゼミで披露した話の舞台であり、はるかによれば最近の学生の間でも盛り上がり始めた怪談の舞台である。そこであの二人は、私を呼び出して何をしようというのか。それが気になる。

無量に直接確かめたいとも思っていた。私に日記に書かせたのは、過去への干渉、歴史を変えようという試みだったのか。その真意を問いたかった。

私は窓から部屋を出て、バルコニーをつたって歩く。ここから低層棟の屋上に出て、非常階段で降りることになる。さっきの警備員が一階の出入り口は施錠しているし、機械警備を鳴らして善良な警備員各位の仕事を増やしたくはない。

しかし屋上には、先客がいた。

「……なんでここに来るんだよ」

少年は舌打ちして顔をしかめた。

5 (占)

少年は屋上に妙な設備を広げていた。屋上の縁ギリギリに置かれたスコープ付きのライフル銃のようなものを見るに、狙撃兵みたいだが、その脇にノートパソコンらしきデバイスが4つも並んでいる（目は4つもない）。

私に向かって文句を言ったきり、彼は何やら作業に戻ってしまい、コンピューター相手に何事か慌ただしく手を動かしている。

「……劫くんこそ、ここで何やってるの？」

少年は舌打ちして顔をしかめた。

「こっちにはこっちの仕事があんの。お前は早く配置に付けよ」

「何の仕事？」

「回収班」

「回収？ 伏線とか回収するの？」

少年はそれ以上答えなかった。彼がここで何かをやらされるのであれば、私の行先には無量の方がいるのだろう。ここで出会ってしまい、声をかけても多くを語らない辺りが、なんだかRPGでイベント前にマップの普通ならいかないところに事前配置されてるイベントキャラに話しかけてもあしらわれるみたいな感じだなと私は思った。そうでもなかった。

「じゃあ私、いくね」

「ああ」

非常階段にも当然、南京錠がかかってはいるのだが、錆びついて壊れている。誰も交換しようとは思わないようだった。だから階段の鉄扉は、押せば簡単に開く。

そうだ、と私は思う。

「ねえ、さっき、その道具引きずって、そこの廊下を歩いてた？」

「は？」

しかし少年は、私の行く手を指差して言った。

「その非常階段から登ったけど」

深夜のキャンパスは、さすがに無人だった。無人であるはずだった。それなのに、この視線はなんだろう。私は見られている。校舎の曲がり角の影に、植えられた銀杏並木の陰に、私を見る目がある。ずるり、ずるりと音がする。私は自分が気付いていることをそれに悟られないように、振り返らずに、あえてゆっくりと、走り出したい気持ちをこらえながら、進んでいく。

内田ゴシックの廻廊を抜けて、工学部一号館前の広場を望む。中央に聳える大きな銀杏の木を、街灯が照らしている。点々と街灯に裂かれた闇の中、蛇塚のあるべき場所は暗がりになってうかがい知れない。しかし、そこには影が立っていた。

あるべくしてそこにあり。

怪異は期待に応えた。

私は携帯電話を取り出して、塚田農場新橋レンガ通り店に電話をかける。

「もしもし、予約をお願いしたいのですが」

「時間通りだ。偉いぞ」

あの女の声がした。

「それで？」

「せっかちな。本物の幽霊を見たら、さすがの君でも焦るのかね」

「あれが本物の幽霊、なんですかね」

影は動かない。影との距離は五十メートルくらい。ちょうど人くらいの背丈だから、それが人影に見えるというだけで、それっぽい大きさの丸太を立てておいたって同じように見えるだろう。それでも私たちは、人らしいものには人を見出さずにはられない。

「期待通り、君が研究対象にしてくれた『蛇塚に崇られて死んだ学生』だよ。あれは」

「私に日記を書かせて、過去を改変したんですか」

「勘がいいね。占い師か？」

「確占ですからねえ」

「それじゃあ占い師さん、ゆっくり蛇男の方に向かって歩いてくれ」

「は？」

私は反射的に周りを見渡した。どこからか安全な場所から、私を見ているのか？

「君は幽霊とか、怖がらない質だろう？ っていうか、怖いものなんてほとんど無いんだろう？」

」

「怖いのは自分の才能くらいですね」

「それは末恐ろしい」

私は人影に向かって、一步踏み出した。

「大丈夫、君の命を危険に晒すようなことはしないし、それ相応の見返りも用意している」

ゆっくり、ゆっくりと人影に近づいていく。

「見返り？」

「いやいや、まさかタダで働いてくれるってわけじゃないだろう？」

五十メートルが四十メートルになり、三十メートルになる。

「そもそも働くって、私ここで何をするのか分かっていませんが」

「『自分がなにをさせられるか分かっている』ことは、君に期待される働きのうちに入っていないから、それで良いんだ」

人影は、はっきり人影で、少なくとも人型だった。フードを目深に被り、俯いて顔は見えない。大人の男の背丈がある。

「本当にここに来るだけで良かったと？」

私は何かが聞こえた気がして、携帯電話を耳から離す。かすかなシュウシュウという音が、人影の方からしている。もうそれと私との間の距離は、数メートルしかない。

「あの、本格的に蛇男みたいなんで

言い終えられなかった。

人影がつと跳ね起きて、腕を伸ばして私を突き飛ばした。いや違う。もともと立っている人影だと思っていたものが跳ね起きるといのはおかしい。そもそも人影ではなかった、人型ではなかった。いや、本体の部分は人型なのだが、フードの下のそれは、今や大きく伸び上がって、五メートルはあろうかという大蛇が踊る。伸びたのは腕じゃない。大蛇は一本じゃない。大小様々な蛇が今まで圧縮されていたみたいに、闇夜に人影型に開いた穴を通過してこちらの世界に溢れてくるみたいに、一気に一息に飛び出してくる。腕が、いや大蛇の一本が、私を突き飛ばして視界が裏返った私は素早く身体を捻って立ち上がり、向かってくる大蛇の三角形の頭を持っていた携帯の角で殴りつけるけれどもそれは全然勢いを殺すことすら出来なくて手首をまるでまさに文字通りに赤子の手をひねるみたいに大蛇は大蛇だけでなく大小様々な蛇が蛇が蛇が腕に巻きついて携帯が地面に転がって私はさすがに自分の身体が再度地面に転がるまでのその数瞬は焦りを自覚する。だが私の身体は地面に叩きつけられることなく、冷やかな蛇体にすくい上げられてそのまま空中に掴み上げられる。街灯が蛇の躰を照らし、濡れたように艶やかなその表面に影がザラザラと流れ落ちていく。

「そこまでされてもまだ焦りが足りていないんじゃない」

電話は地面に落とすはずなのに、間近に女の声がする。

締め付けがきつくなり、肺から空気が無理やり吐き出される。両腕はピッタリと身体に押し付けられ、手首が変な方向に曲がり痛み、空中に浮いた足から靴がこぼれ落ちる。気が遠くなって、私の視点が持ち上がる。私は、蛇に絡みつかれて空中に持ち上げられた、三ト八恵の身体を見下ろしている。青白い顔が苦痛と恐怖に歪んでいる。私が恐怖している？ 本当に？

「もっと恐れて貰わないと」

どこからか女の声がする。かろうじて自由に動く首で見回しても、女の姿はない。ただ、人影が立っていた場所から大蛇が湧き出してくる。詰まった流し台から血が溢れるみたいに。ずるり、ずるりと重い身体を引きずって。血糊のこびりついた死体を引きずり回すように。広場が血の海に染まり、私の身体を這い回る。

「恐れないと、畏怖して貰わないと、助けは来ないぞ」

不意に風を切るような音がして、脳が揺れた。私の顎のあたりを大蛇が強かに殴りつけ、しかし私は地面に倒れることも出来ず蛇に縛り付けられたままだった。二度、三度続けて殴られ、血の味が広がる。足がつかず、歯を食いしばることも出来ない。チカチカする視界が戻ってくると、それはよく視えた。

私は殴られた拍子に眼鏡が外れたのだと気づく。

それは黒かった。闇だった。怨嗟。ただただ純粋な憎しみ。生身の人間には生み出し得ない単純すぎる感情。恨み。怨み。憎しみ。人間のマイナスの感情は数多く見てきたけれど、視てきたけれど、ここまで単純で濃縮されたマイナスがあるのだとは私は知らなかった。思わなかった。

私は初めて、恐ろしいと感じた。

一体これは何なんだ。私は何をされているんだ。蛇男、いや蛇そのものに捉えられ、空中でぎりぎり身体を締め付けられ、息を吸うのも絶え絶えで、女の声は助けてはくれない。

「私らは助けないさ。他にやることが」

蛇が、拳の大きさほどの頭の蛇が、私の頬に身体を擦り付ける。氷のように冷たい表面に撫でられると、凍えるように皮膚が痛む。顔をそむけようとする私の首に蛇が巻き付き、私の身体からまた自由が奪われてしまう。再び表面にやってきた蛇の赤い瞳には、ただただ悪意だけが視える。私は想像する。想像してしまう。想像させられてしまう。その悪意が、憎悪が、怨嗟が、私の喉元に噛み付くところを。その蛇が私の顔に近づき、私の口元にやってきて、私は顔を動かすことも出来ず、蛇の舌が私の唇をチラチラと舐める。

蛇は、私が理解するのを待っている。蛇は、私が視るのを待っている。私が想像するのを待っている。おぞましい想像を待っている。赤い瞳を私は見て、視て、理解する。こいつは、私に噛み付こうとしているわけではない。少なくとも外側からは。うそ、とか、やだ、とか、月並みなセリフを吐きそうになる私に私は吐きそうになって、けれどどちらも叶わない。無理やりに顎がねじ開けられ、口の中にずりりと氷の塊のようにその頭が入ってこようとするのを知ってここで本当に私は恐怖する違う食いつかれるのではなくこいつは私の中に私の口から入ろうと這入ろうとしている顎どころか身体全体が頭蓋までもが蛇に締め付けられ自由の一切が効かず蛇の赤い瞳の悪意が口蓋の内側を蛇の頭が撫で咳き込むための息もなく喉が内側から締められる吐き気に痙攣することすら許されない口の中と鼻の奥が凍るように熱くえづく私に蛇の胴が息ができな気を失いかけ

「いらっしまったようだ」

辺りの灯りが消え、世界が闇に沈む。

銃声を聞きながら、私の意識は遠のいていった。

7 (占)

悪い夢を見ていた。悪い夢だったと思いたかった。一度立ち上がって、私は胃の中の物を思いっきり吐き出した。裸足の足にまで吐瀉物がかかった。吐き出してしまおうと一気に力が抜けて、尻もちをついた。まだ頬にあの冷たい感触が残っていて、背筋が一気に冷え込んだ。

「お疲れ、占い師様」

音もなく闇の中から現れた無量は、やはり黒いライダースーツを来て、無言でいればスタイルの良い身体もそのまま闇に溶けてしまいそうだった。私は地面に転がっていた眼鏡を拾ってかける。フレームが歪んでいるが、かろうじて眼鏡の役目を果たさないことはできる。

「酷い顔だな」

無量が半笑いで言った。

声を出そうとすると喉が焼けるようだった。私はひとしきり咳き込んでから言った。

「なんですか、これは」

「まあ、これでも飲んで落ち着きなよ」

そう言うのと無量は缶コーヒーを投げてよこした。

私はそれを痺れた手で奇跡的にキャッチした。

もう一缶飛んできて私の肩に直撃した。

「多いよ！」

「おや、アイスコーヒーはダブルじゃなかったっけ？」

「アイスコーヒーにダブルとか無いから」

「失礼、英語なのがわかりにくかったか。ドッピオだね」

「ドッピオは二缶ってという意味じゃないよ」

喋りすぎてめっちゃめっちゃにむせ、咳き込んで涙が出てきて、とりあえず缶コーヒーを開けて一口飲んだ。

麦茶だった。

「どこで売ってんだよ缶入りの麦茶！」

「最近の大学生協は品揃えが良いな？」

「聞いたことないわ」

もう一缶の方はどうせ麵つゆとかだろうから捨てた。

「もう分かっていると思うけれど、申し訳ないが君を餌にさせてもらった」

私は黙って麦茶を飲む。血と胃液の味がする。

「君の日記を含めて、いろんな情報操作でもってここに『蛇男』という即席の化け物を作り出し、君がそれに捕まってもらう。危害を加えられてもらう。恐れてもらう。それによって呼び出したわけだ」

私は黙って立ち上がる。よろよろと。文学部の方に紫色の灯りがちらついている。

「……おや、言って大丈夫かな？」

「何が」

「この先を言って大丈夫か、って聞いているんだよ、占い師様」

無量が愉快そうに笑った。紫色の灯りは揺れながら近づいてくる。

「何が言いたいのかわかりません」

無量が肩をすくめた。いちいち仕草が大きい。

「蛇男は明らかに有害だ。学生が捕まって、今まさに危害を加えられている。人間に害をなす妖異を現し世から排除する公安としては、見逃してはおけまい。だからやってくる。蛇を消しにやってくる」

私は黙って空き缶を放り捨てた。

「狩人が、ね」

紫色の灯りは、いまやリング状に見える。ゆっくりと、人の高さくらいの空中を滑り、こちらへ近づいてくる。

「そこで待機していた私と劫で、狩人を捕らえる。狩るものと狩られるものが逆転する」

「……」

「狩人が、藤木圭吾と交換するための人質になる」

「……」

「いや、人じゃあないんだけどね」

紫色の灯りはいよいよ歪んだ眼鏡ごしでも判別できるようになる。二メートル程の流線型のボディは銀色に鈍く輝き、それを紫色のリングが拘束している。連れ添っている少年の瞳が紫色に輝き、その拘束の主であることを告げていた。

「回収、したよ」

「よくやった」

そう言って無量は、回収されてきた『それ』を、その銀色のボディを小突いて言った。回収班の役割というのは、それだったのか。

「実験用妖異排除自動機械、通称『狩人』」

微かに硝煙のにおいがする。

「バラしちゃって悪いね。狩人っていうのは、これのことなんだ」

「……バラすって、何のことですか」

「おやおや、しらばっくれるつもり？ 不誠実だなあ。信頼できない語り手だなあ」

あなただって信頼は出来ない。

「そうだね、私だって信頼は出来ない。けれど、これは事実だ」

そう言って銀色を叩く。

「単純にものすごく高価だし、とてもではないが公表できない技術がたくさん詰まっている。奪われても壊されても、闇の市場に流されてもすごく困る。一台で藤木圭吾が十人くらいは取り返せるだろう。それくらい価値がある」

「よく捕まえられましたね」

「まあね。モノは良くてもまだ運用が熟れてない。実証実験も始まってまだ半年だ。結構スキがある。いやいやそんなことより、私が言いたかったのは」

お前が言いたいのは。

「君が散々張っていた、狩ブラフが本当に狩ブラフだってことだよ」

.....狩ブラフ。

狩人をにおわせることで、狼を迷わせる作戦。

「草苺はるかには狩人ではない。草苺なんて、狩なんて音を入れて、それに思わせぶりに狩人の話を何度も出して、君は彼女が狩人だって方向に、話を持って行きたかったようだけれど。そこに逃げ込みたかったようだけれど。別にそういうレギュレーションがあるわけじゃない。誰もそんなこと言ってない。狩人はこいつ。草苺はるかは役職持ちじゃない。異常ではあるかもしれないけれど」

異常。

私が知りたくなかったこと。彼女がもう、普通の人間ではないこと。

「だって異常だろう？ 君が同棲してる彼女、ダブルじゃないか」

ダブル。

「失礼、英語なのがわかりにくかったか。ドッペルって言ったほうが良いのかな」

そう。私は。

私は、親友のドッペルゲンガーと同棲している。

病院で寝込んでいる彼女のドッペルゲンガーを、自宅に居候させている。

「ドッペルゲンガー百合.....」

私は眼鏡を持ち上げて、精一杯作った余裕の表情で、回収班の少年に目配せして言った。

「タイトル回収、ってことか」

タイトルではなかった。

(第四部につづく)